

藤原宮の役民の作る歌					
八隅知之 やすみしし やすみしし 國をすべて支配される	吾大王 我が大王 わがおほきみ われらが大王	高照 高照らす たかてらす 高く照らす	日乃皇子 日 皇子 ひのみこ 日の皇子	荒妙乃 荒妙の あらたへの 荒栲の	藤原我宇倍 藤原が上に ふじはらがうへに 藤原の地で
食國乎 食す國を をすくにを 國を	賣之賜牟登 見したまはむと みしたまはむと お治めしようと	都宮者 みあらかは みあらかは 宮殿は	高所知武等 高知らさむと たかしらさむと 高く造ろうと	神長柄 神ながら かむながら 神として	所念奈戸二 思ほすなへに おもほすなへに 思し召して
天地毛 天地も あめつちも 天地の神も	縁而有許曾 寄りてありこそ よりてありこそ 寄っていただくことで	磐走 石走る いははしる (枕詞)	淡海乃國之 近江の國の あふみのくにの 近江の國の	衣手能 衣手の ころもでの (枕詞)	田上山之 田上山の たなかみやまの 田上山の
真木佐苦 真木さく まきさく (枕詞)	檜乃孺手乎 檜の孺手を ひのつまでを ヒノキの丸太を	物乃布能 武士の もののふの (枕詞)	八十氏河 八十宇治川に やそうぢがはに 宇治川に	玉藻成 玉藻なす たまもなす 藻のように	浮倍流礼 うかべ流せれ うかべながせれ 浮かべ流すと
其乎取登 そを取ると そをとると それを引き上げようと	散和久御民毛 騒く御民も さわくみたみも 騒がしく働く民たちも	家忘 家忘れ いへわすれ 家も忘れ	身毛多奈不知 身もたな知らず みもたなしらず 我が身も知らず	鴨自物 鴨じもの かもじもの 鴨のように	水介浮居而 水に浮きゐて みづにうきゐて 水に浮かんで
吾作 吾が作る あがつくる 自分が造る	日之御門 日の御門に ひのみかどに 日の御門を	不知國 知らぬ國 しらぬくに 異國の	依巨勢道從 寄し巨勢道より よしこせぢより 巨勢道から	我國者 我が國は わがくには 我が國は	常世介成牟 常世にならむ とこよにならむ 永遠に栄えると
圖負留 圖負へる あやおへる 吉兆を背負う	神龜毛 くすしき龜も くすしきかめも 珍しい龜も	新代登 新代と あらたよと 新しい世と	泉乃河 泉の川に いづみのかはに 泉川に	持越流 持ち越せる もちこせる 持ち運んだ	真木乃都麻手乎 真木のつまでを まきのつまでを 真木の丸太を
百不足 百足らず ももたらず 百には足らないが	五十日太 筏に作り いかだにつくり いかだに組んで	浜須良牟 浜すらむ のぼすらむ 川を遡らせ	伊蘇波久見者 いそはく見れば いそはくみれば 働くのを見れば	神随介有之 神からにあらし かむからにあらし 神だからであらう	万葉集 卷一 50 藤原宮之役民